日本天文遺産「キトラ古墳天井壁画」の公開活用

キトラ古墳の石室の壁面には、青龍（東壁）、朱雀（南壁）、白虎（西壁）、玄武（北壁）の四神と、獣頭人身の十二支、そして天文図と日像・月像（天井）が描かれています。

2020年３月17日付で、国宝キトラ古墳壁画のうち天井「天文図」が、「キトラ古墳天井壁画」として日本天文遺産に認定されました。日本天文遺産とは、日本天文学会が日本の天文学や暦学にとって歴史的意義のある史跡・建造物、物品、文献を認定する制度で、2018年に創設されました。

天文図には、約360個の恒星による74座の中国星座のほか、内規、外規、黄道、赤道の四つの円が描かれています。中国大陸での観測結果をもとに作られたと推測されており、恒星や赤道等の位置を解析することで、原図の観測年代や観測地の緯度を求める研究もおこなわれています。

キトラ古墳天井壁画は、古代における天文学の水準のみならず、アジア大陸から日本への科学知識や文化の流入を知ることができるものであり、天文図は、科学的な分析に耐えうる本格的な星図として、天文学史上きわめて重要であると評価されました。

これを記念して、日本天文遺産認定記念ポストカードを作成し、「キトラ古墳壁画の公開（第17回）」の参加者に配布しました。天文図の星や日像・月像の金と銀のきらめきを箔押しで再現し、紙の質感にもこだわり、白い漆喰に天文図が描かれた、まさに当時の様子がわかるような仕上がりとなっています。手元に光る星々から古代に思いを馳せていただけたらと思います。　（埋蔵文化財センター　吉田 万智）

星の輝きを再現した日本天文遺産認定ポストカード

赤米献上隊が推定宮内省地区へ

平城第22次調査で出土した、但馬国養父郡小佐地域から赤米五斗を平城宮に納めたことを示す木簡に因み、今秋も10月30日に、兵庫県養父市八鹿小学校の６年生児童が収穫した赤米を平城宮跡にもってきてくれました。八鹿町小佐地区では1980年から赤米の栽培を始め、地元の小学生たちが田植え・稲刈り・感謝祭・わら細工づくり等の体験活動をおこなっています。その締めくくりとして例年届けてくれる赤米を、私たち奈良文化財研究所の研究員が、天平人に扮して受け取っています。

今年は、新型コロナウイルス感染症が流行し、赤米の贈呈式の開催が危ぶまれましたが、八鹿小学校では修学旅行先を奈良に変更して、平城宮跡に立ち寄ってくれることとなりました。

平城宮跡における復元建物のある空間を積極的に活用する目的から、今年度はこの赤米の贈呈式を推定宮内省地区で実施することとしました。赤米献上隊は、平城宮跡遺構展示館の東の駐車場から俵を担ぎ、推定宮内省地区へ向かいました。南門から入った児童たちは、南第二殿の南の広場に整列し、贈呈式をおこないました。代表児童からの挨拶があり、赤米１升とお手製の木簡が手渡されました。式の後、児童たちは、推定宮内省地区のすぐ近くの木簡出土地点を眺めながら、馬場史料研究室長の木簡についての解説を聞き、平城宮跡を横断して本庁舎で実物の木簡を実見しました。

天候に恵まれた中で、地元を代表してやってきた児童たちの凛々しい姿は、「なぶんけんチャンネル」で公開している動画で見ることができます。ぜひご覧ください。　（文化遺産部　高橋 知奈津）

平城宮推定宮内省地区での赤米贈呈式の様子